

# 新出・国文学研究資料館蔵『扇の草子』屏風

——書誌と翻刻

安原眞琴

『扇の草子』とは、十七世紀前後、中世後期から近世初期の一時期中に、盛んに制作、享受された文芸作品の総称である。<sup>①</sup>現段階でも五十本以上にのぼる伝本が確認されており、いまだに巷間などから新たな伝本が発見されているので、今後も増加すると予想される。<sup>②</sup>

この作品群は、いわゆる（絵入り本）に属し、扇絵の挿絵が描かれ、その周囲に絵の内容にみあったウタが、一扇につき一首ずつ散らし書きされている。一瞥、雅な印象を受けるが、勅撰集所収の有名な古歌もあれば、連歌や俳諧、歌謡までもが収められており、しかもそれらは、今のところ規則性の見出せない、アトラシダムな形で配列されているのである。

扇絵についても同様であり、およそ、ウタの内容を描いた《詩歌絵》と、ウタの背景にある物語を描いた《物語絵》に大別できるのだが<sup>③</sup>、そのいずれにも不思議なものが散見する。

図①として掲げたのは、男と女がそれぞれ背を向けて距離を置いて描かれた扇絵であるが、女の足元を見ると、地面に唐突に置かれた琴の端を踏んでいるのが分かる。現代風に言えば、極めて

シユールな絵といえよう。

その周囲には次のごときウタが記されている。なおこれも、『仏国禪師集・夢窓国師集・学海禪師集』（彰考館小山田文庫丙本・貞享四年（一六八七）以前写）や、『白身房』（天文（一五三二）五五）頃写、『薄雪物語』（慶長末年（一六一五）以前成）といったお伽草子や仮名草子などに見出せるので、十七世紀前後には流布していたようだが、今のところ原拠を詳らかにできない。

あふ時はかたりつくすとおもへ共 別になればのこる言葉  
この歌によつて、〈男女が距離を置いて背を向けて立っている〉絵は、ウタの「別れ」の情景を描いた《詩歌絵》であったと判明する。しかしながら、地面に置かれた楽器の琴と、女がその端を踏んでいる絵については、ウタには詠まれておらず、意味を理解しかねる。

そこで、視点を変えて、ウタの文言「のこる言葉」に注目してみよう。「言葉」は声に出して読むと「ことのは」となるので、その「こと」という単語を、同音異義語の「琴」に置き換え、また、「は」には「端」の字を当てると、「琴の端」という単語が完

成する。要するに、この（琴の端に女が残っている）絵は、ウタの「のこる言葉」という文言をさとらせるための、『判じ絵』になつていたのである。

このような不可思議な絵が扇面の枠の中に描かれているのは、それ相応の背景があつてのことのようである。十七世紀前後の古記録類『実咲記』や『室町殿日記』、あるいはお伽草子の『はいかひ絵巻』や『十本扇』など複数のテキストに、実際の扇に描かれた絵を見せて、その絵の画題であるウタを当てさせる（扇遊び）が行われていたとの記述が見出せる。これらを参考にすることができれば、『扇の草子』は、ナゾナゾに類する扇遊びから派生した文芸であつた、との推断が可能となる。

さて、近時巷間より、また新たな伝本が発見された。それは、国文学研究資料館の所有に帰した、屏風仕立ての伝本である（図②）。料紙の大きさから元奈良絵本であつたと推定されるが、現状では料紙が一頁ずつ切り取られ、六曲一隻屏風に貼り付けられている。

各扇に二葉の料紙が上・下二段に貼られており、各葉には三扇三首の扇絵とウタが上・中・下に描かれている。つまり、合計十二葉、三十六扇三十六首が現存するわけだが、元はより大部の作品であつた可能性がある。

本伝本には、特筆すべき大きな特徴がある。それは、料紙の地に柳木が描かれるという、『背景画』を有する点である。類例として指摘しうるのは、現段階ではハーバード大学美術館に所蔵される絵巻のみである。なお、この絵巻に描かれた背景画は水草であり柳木ではない。

以下、本稿では、書誌と翻刻、及び所載歌の簡略な典拠を提示することで、本伝本を簡単に紹介させていただくこととし、背景画や扇絵、ウタの特質などに関しては別稿を期したい。

## 注

- (1) 『扇の草子』の詳細は、拙著『扇の草子』の研究―遊びの芸文（ベリかん社、二〇〇三年）を参照していただきたい。
- (2) 二〇一三年四月までに管見に入った伝本は、徳田和夫氏との共著「学習院女子大学図書館蔵 新出『扇の草子』の紹介」（『学習院女子大学紀要』第一五号、二〇一三年三月）に提示したが、その後さらに数種の断簡類が古書目録に掲載された。
- (3) 「詩歌絵」という用語については、拙稿『扇の草子』の再検討―文化・文学・絵画を横断する新たな視覚文化―（『文学・語学』第一九九号、二〇一一年三月）を参照していただきたい。
- (4) この絵巻の概要と翻刻は、拙稿「ハーバード大学美術館所蔵『扇の草子』―永い眠りから目覚めた稀少な絵巻―」（国文学研究資料館編『絵が物語る日本』三弥井書店、二〇一四年）で報告した。

## 書誌

装訂 屏風装 六曲一隻 九五・五×二八八・〇糎（第一扇横四

八・八糎）金地の屏風に各扇上下二葉ずつ料紙貼付

料紙 鳥の子 縦三〇・二一〜三一・八種×横二三・一〜二四・四種

扇絵と和歌 三六扇三六首（各葉三扇三首）

題簽・奥付 なし

印記 なし

所蔵機関 国文学研究資料館 貴重書89-151

備考 十七世紀初期か。元大型奈良絵本と推定される。上下にす

やり霞を配する。扇絵と背景画の柳木は、奈良絵本に見ら

れる稚拙で愛らしい画風である。柳木は四季の描き分けが

なされた、いわゆる「四季柳」となっている。「思文閣古

書資料目録」第二一六号（二〇一〇年二月）掲載。

## 翻刻

### 【翻刻の要領】

一、底本のまま翻刻したが、「松」の異体字は常用漢字に改めた。

二、料紙の左端が切断されている箇所や虫損の補修箇所など判読

不可能な場合は□とし、僅かに残る文字から推測可能な場合

### 【第一葉】

1 (423) ときはなる松のみとりも春来れば いま一しほに色まさりけり

『古今集』（二四）一・春上・源宗于・寛平御時后宮歌合によめる

2 (103) あつまちやあこやの松に木かくれて 出でたる月のいでやらぬかな

『夫木抄』（二三七・三八）二九・松・題知らず・懷中・読み人知らず

は文字を記して□を付した。

三、屏風の第一扇上部に貼られた料紙の、最上部に書かれた和歌

から順次翻刻し、各々整理番号を付して頭書した。

四、頭書番号の下に（ ）に入れて記載したアラビア数字は、（注

一）の拙著に収録した伝本すべての収載歌に付した通し番号である。

五、未だ典拠を探し得ない和歌を多く残すが、参考までに一、二

点掲げ、それが新編国歌大観所収歌であれば、その番号を

（ ）に入れて漢数字で示した。

六、また、掲載した典拠より異同が少ないなど注意される作品が

ある場合は、典拠の左側に\*を付して略記した。

七、掲載した典拠との異同は、翻刻の該当部分に傍線を引き、そ

の右側に異同語句を記載した。

末筆ながら、翻刻と写真の掲載を許可していただきました国文学研究資料館に深謝申し上げます。

（やすはらまこと 本学兼任講師）

3 (375) むさし野は山行く末はの葉はもなくほのくもひとつの武藏野にと 草の原より出る月影

『新古今集』(四二二) 四・秋上・撰政太政大臣(良経)・五十首歌たてまつりし時、野径ノ月

【第二葉】

4 (52) むさし野はけふはなやきそ若草の つまもこもれり我もこもれり

『伊勢物語』十二段

\*『古今集』の初句は「かすがのは」

5 (17) むさし野は月の出つへき山もなし 草より出て草に入かな

元和三年(一六一七)成『徳永種久紀行』

アレックス・カー氏所蔵・烏丸光広(一五七九〜一六三八)自筆屏風など

6 (49) 月かくす花の木す糸をのし見るけければたきりたくもありきりたくもなし

寛永(一六二四―四四)中期刊『新撰狂歌集』下・雑

\*元和(一六一五―一六二四)頃刊『新撰犬筑波集』の上句は「さやかなる月を隠せる花の枝」

【第三葉】

7 (87) わか宿の菊のしら露けふことに 幾夜つもりて潤となるらん

『拾遺集』(二八四) 三・秋・清原元輔・三条の后宮の裳着侍ける屏風に、九月九日の所

8 (142) かきりあればかやか軒半の月もみつ しらぬは人の行末の空

『後鳥羽院遠島百首』(第三類本) 秋

9 思へたた野辺のまくすもあき風の ふかぬ夕辺はうらみやはずる

『新後撰集』(一一七一) 十六・恋六・権中納言公雄・弘安元年、百首歌たてまつりし時

【第四葉】

10 (70) いかにせんわかれし夜半をなかむれば 慰む宿のあり明の月  
未詳

11 しら菊のうつろふまでもとはれねは なにの情か今はあるへき  
未詳

12 たち帰りとふへき暮はしらね共 この戸はたてしきぬく空  
『草根集』(八〇八六) 寄戸恋

【第五葉】

13 (30) ものゝふの弓はり月のかけみえて あけぬにもなく関の庭鳥  
未詳

14 あか月をまたねにたてぬ鳥声子のわかれある夜夜はの契りともかな  
『草根集』(七六七六) 寄鳥恋

15 あか月のわかれもしらぬ鳥のこゑねは 何のつらさに鳴はしめけん  
『新後撰集』(一〇一九) 十三・恋三・大江頼重

【第六葉】

16 (29) 人の子の親はにらむなる物をとて 恋しきときはかゝみをぞみる  
謡曲「松山鏡」など

17 (63) 梅の花誰袖ふれし匂ひこそと 春やむかしの月にとは、や

『新古今集』(四六六) 一・春上・右衛門督通具・千五百番の歌合に

18 (70) いかにせむわかれし夜半をなかむれば 慰むやとのあり明の月

未詳

【第七葉】

19 (35) 桜ちる木の下風はさむからて 空にしられぬ雪そふりける

『拾遺集』(六四四) 一・春・紀貫之・亭子院歌合に

20 (165) 思ひやれとふ人もなき山中里に かけひの水の心ほそさよを

『後拾遺集』(二〇四〇) 十七・雜三・上東門院中將・長樂寺に住み侍りける頃、人の何事かといひて侍りければつかはしける

21 (356) 小枝ふく嵐のかせの我ならば をしきにはなはちらさゝらまし

未詳

【第八葉】

22 (59) くものゐいにあれたるこまはつなく共 ふたみちかくる人はたのまし

『謡抄』鉄輪など

23 (60) 花さかはつけんよといひし山さ守どの 使くるおとすなる脚は来たり馬にくらおけ

『源三位頼政集』(六三三) 歌林苑にて人人花の歌読み侍りしに

\* 『謡抄』鞍馬天狗とは異同なし

24 (348) 花こへにおとりもやする御吉野、よしの、まきのさくらつきげに  
未詳

【第九葉】

25 (27) いたつらに過る月日はおほけれと 花みてくらす春をすくなき

『古今集』(三三二) 七・賀・藤原興風・貞保親王の、后宮の五十賀たてまつりける御屏風に、桜の花の散る下に人の花見  
たるかた描けるを読める

26 (455) 此春はちり積るともきよめせし 花をはくとや人のいはまし  
未詳

27 雁かねの秋なくことはことほりや 帰る春さへ何かものうき

『統後撰集』(五七) 二・春中・菅贈太政大臣・帰雁を

【第十葉】

28 (274) むらさきの糸よりかけてさくふちの にほひに野へのたちやかわりし  
『夫木抄』(二二四七) 六・春六・題知らず・雲葉・菅原太政大臣

29 むらさきの色には心あらねとも ふかくそ人を思ひそめぬる

『新古今集』(九九五) 十一・恋一・延喜御歌(醍醐天皇)・中将更衣につかはしける

30 (176) すみよしの松に波うつ藤なれば 神も心をかけてこそみれ  
未詳

【第十一葉】

31 (137) 雪ならは幾たひそてをはらはまし はなのふ、きのしかの山こへ

『六花集』(松平文庫本) 一・春・中務卿・続拾

『謡抄』志賀・三井寺など

\* 『続拾遺集』にはなし。

32 (43) さかへ行弓矢の家のとりくに 此たひことに名をあくる哉

未詳

33 (72) 駒とめて袖う(虫指)カはるふ影もなし さの、渡の(左端切断)雪(左端切断)の夕暮

『新古今集』(六七二) 六・冬・定家朝臣・百首歌たてまつりし時

【第十二葉】

34 (6) はまさとに松のをち葉をかきなれて あすのたききに風を(あらしを)こそまて

『天神御詠』(国会本・書陵部本他)

『夢窓国師集』(刈谷本・高松宮本) など

35 (71) 是や此行も帰るも別ては、しるもしらぬも逢坂のせき

『後撰集』(二〇八九) 十五・雑一・蟬丸・相坂の関に庵室を作りて住み侍けるに、行き交ふ人を見て

\* 『謡抄』安宅・盛久などとは異同なし。

36 (54) 鷹かりにいつれば鳥のなかりけり こわたの山に鳥やあるらん

未詳

図1 架蔵『扇の草紙』複製本



図2 国文学研究資料館所蔵『扇の草子』屏風